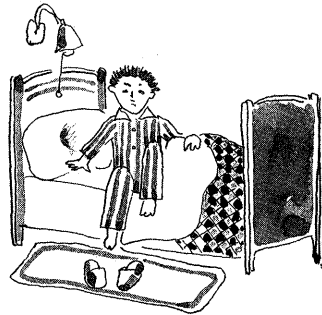


# 山陰は暗い？

小坂 恵子



山陰という言葉や響きから、どんなイメージをかきたてられるでしょうか。東京にいた頃、出身地を聞かれて、鳥取県と答えると、

「鳥取？ ああ、山陰の……」

とかえってくるのが、ほぼおきまりのパターンでした。そして、

「冬、雪が降って、暗くて、海が荒れていて……」

とつづくのも毎度のことでした。もちろん、鳥取砂丘、松葉ガニ、二十世紀梨などの名前も出ました

が、それらは単発的で、どうしてもみんな演歌の歌詞みたいな情景しかわかないのだろうと思ったものでした。

たしかに、冬は、太平洋側と日本海側ではっきりお天気が分かれることが多いものです。天気予報でしばしば目にするのは、太陽の絵に対して、雪だるまや雪の絵。これを実感したのが、受験のために、冬、はじめて山陽側に出たときのことでした。特急に乗って中国山地を越え、それまでの雪空から抜け

るような青空への変化を目にしたときは、頭ではわかっていても、大きなショックでした。生まれ育った者でさえこんなですから、遠く離れて住む人々が、心理的に暗い印象を持ちがちなのも仕方ないことなのかもしれません。

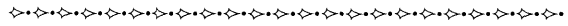
しかし、山陰の名誉のために記しておきたいのですが、冬は、荒れる日ばかりではありません。雪の積もる日もあります。冬型の気圧配置がゆるんで穏やかな天気になった日の空は、やさしい水色。この小春日和を楽しみに冬を過ごしています。そして、もう都会では少なくなってしまった、星空を楽しめる環境が、そこかしこにあるのです。山陰には、陽光の明るさ、そして夜の闇が、自然とともにまだ残っていると言えるのではないのでしょうか。

### 暗がりから出てきた妖怪たち

「ゲゲゲの鬼太郎」をご存じでしょうか？ 作者の水木しげるさんの出身地鳥取県境港市に、「水木し

げるロード」ができ、鬼太郎、目玉おやじ、ねずみ男をはじめ、漫画でおなじみの妖怪たちが、かわいらしいブロンズ像となって道行く人たちを楽しませてくれています。妖怪がかわいらしいとは、奇異に感じられるかもしれません。けれど、台座の上の身の丈一五センチメートルほどの小さな像は、そのおどろおどろしい姿にもかかわらず、ユーモラスささえ漂わせているのは、白昼、多くの人々に愛でられているからでしょうか。

近年、水木さんの自伝的小説をテレビドラマ化した、「のんのんばあとおれ」がNHKで放映されました。視聴なさった方も多いことと思います。劇中、主人公の少年に妖怪話をする年配のお手伝いさん、のんのんばあ」のモデルは、水木さんのおばあさんだと聞いたことがあります。幼い頃、おばあさんが語ってくれたちょっとこわい昔話や迷信、その登場者たちが、後年の「ゲゲゲの鬼太郎」のキャラクターとなったのだそうです。思えば、この「の



んのんばあ”のようなお年寄り、幼い頃、身近にいて、子どもたちが好きになちよびつと怖い話をせがむと、いろいろと語ってくれたものです。当時、ちょっとした行事には集会所を使わず、持ち回りで個人の家に人々が集まったものでした。子どもたちも、友だちのだれそれの家となると大人についてやって来ます。寄り合いの間、子どもたちが退屈しないよう、子守代わりにいろいろと面白くも怖い話をしてくれるのが、このようなお年寄りたちでした。話を聞いていると、明るい部屋にぎやかに人々がいるのに、思わずゾクツとして、背後に暗闇が忍び寄ってくるように感じたものでした。

いい加減眠くなった帰り道、集落とはいえ、農村のことですから、一軒一軒の敷地も屋敷も広く、点在しているところに、街灯もほとんどなく、軒先の小さな灯の他は、星明かり、月明かりを頼りに歩くのです。道の両側に竹やぶが覆い被さっているところを通り抜けるとき、先ほどの話が思い出されて、

竹やぶから何か出てくるのではないか、追いかけてくるのではないかと、大人の手をぎゅっと握りしめ、目をしっかりつむって歩いたものでした。

けれど、この暗闇も、蛍とりのときには、よき友でした。学校で場所と時間を約束して出かけて行くとき、竹やぶは走り抜けるものの、獲物にわくわく、お年寄りの話は、必死で思い出すまいとしたものでした。小川に舞う蛍の光の点滅は、美しく幻想的で、今でも懐かしく思い出されます。

蛍といえば、こんな経験もあります。大山山麓の少年自然の家に、児童たちと行ったときのことです。夜は、おきまりの肝だめし。施設は、いわば野中の一軒家ならぬ山中の一軒家のようなもの。下流の集落を見下ろす田んぼ道から雑木林を抜けて宿泊先まで帰るのがコースです。出発前にいくつか怪談を聞かされてスタートするのですが、途中の林道が、鼻をつままれてもわからないような闇なので、はじめて歩く道ですから、暗がりを手探りの状

態で進むところにふと見えた光が、数個。一瞬の後にそれは、ゲンジボタルらしいとわかったのですが、この時ばかりは、どきっとしました。明るい玄関にたどり着いたときは、心底ほっとしたものでした。

子どもたちは怖い話を喜ぶのも、暗がりのをのぞき込むのも、そばに大人の手や明るい安全な場所があり、すぐに逃げこめるといふ確信があるからではないでしょうか。「トイレの花子さん」は、あつという間に全国の学校に伝わりましたが、かつてお年寄りの話に息をつめて聞きいていた子どもたちのよ

うに、怖がりつつも明るく楽しんでいるように見受けられます。媒体はかわっていくものの、いつの時代も、子どもたちは、闇を創りだし感じ取る名手なのかも知れません。

子ども時代から遠く離れた今、思い返してみると、いつの間にか、暗がりには何かいると想像することもなくなり、怖がることもなくなってきました。成長することは、闇を切り捨てて行くことなのでしょう。そんな大人たちが、暗がりから妖怪たちをひっぱりだし、かわいらしく据えつけてしまったのかも知れません。

(小学校教諭)

## 暗さもつつみこむ園生活

藤野 敬子

